

昭和二十七年六月二十日印刷
昭和二十七年六月三十日發行

關西大學國文學會

「輕み」作風に就いての芭蕉の教説……………廣田二郎……………(一)

伊勢蕉門……………西山隆二……………(六)

齋藤茂吉の作歌の態度……………谷澤永一……………(四)

浄瑠璃評判記解説……………横山正……………(五)

彙報……………(六)

國文學

昭和二十七年六月
第七号

前号要目

枕草子本文整理札記……………山脇毅

夷がきの芸態……………盛田嘉徳

来山の集について……………飯田正一

西鶴用語小考……………前田金五郎

「好色一代女」//老女のかくれ家の挿絵に就いて……………中野真作

【編集後記】

●客中御何。——本号が、会員の御手許に届くころは、学校もそろそろ休暇に入ることと思う。各位の御自愛を祈る。

●五月になつてから、大阪で、万葉学会と日本近世文学会と、相次いで、二つの学会が開かれた。万葉講演会（本会と共催）のときは、生憎としゃ降り雨だつたが、高木市之助・神田喜一郎・澤瀉久孝氏の各講師を迎へ、大阪朝日新聞社講堂は、聴衆で埋まつた。近世文学講演会は、竹本樹太夫・藤波康隆・守隨憲治・坂東義助諸氏と変化に富んだ顔触れで、大阪毎日新聞社講堂に開かれ、聴衆を魅了した。大阪に於けるこの種の学会は、従来例に乏しいものであつたが、それがいづれも、多くの人々の関心を集めたことは、すくなくとも注意すべき事柄だつたといえる。大阪でも、こういう学会に期待する人が、ようやく多くなつてきたのである。

●大阪といへば、こゝでは、日本文学協会大阪支部の存在も忘れてはなるまい。同支部は、一時沈滞してゐたようであるが、最近では、若い層の支持を得て、活潑な動きを示そうとしてゐる。支部としては、なお大卒方面との結びつきなどにも、問題は残つてゐるが、とにかく今後が注目される。

●以上のような一二の事実だけで軽率しい断定を下すことは、避けなければならぬ

と思うが、こうした事実を通じてすくなくともそこに何か一つの新しい動きが見えてきているといふことも、或はいつてよきそである。われわれの學問は、時代に致して適合するようないふことは極力警戒しなければならぬが、しかし、だからといつて、時代の要請するところに、故意に眼を覆おうとするような態度でも、新しい明日への寄与といふことは、期し難いであらう。

●近頃、共同研究といふことが次第にさかになり、それが着々見事な成果を挙げられてゐるのは、注目すべき現象であると思ふ。學問といふものは、天才によつて築かれるものでもあつるが、同時にまた素人の精進でもある。

●本号には、四篇の論考を取めた。廣田二郎氏の「靴の二作風」に就いての「芭蕉の教説」は、「靴の二作風」の構造を分析し、「靴の二作風」の中に、「芭蕉俳諧の本質を追及すると共に、そうした理念を成立せしめた「基底文化」について考察したものである。「靴の二作風」といふものを考える上で注目すべきものであると思ふ。

●西山隆二氏の「伊勢蕉門」は、本誌第二号所載「蕉門の成立」の続稿と見るべきもので、伊勢蕉門の成立につき、精緻な論証を試みたものである。蕉風の傳播を考える上で、逸することが出来ぬものとなる。●谷澤永一氏の「斎藤茂吉の作歌の態度」は、卒業論文の胡論文として提出されたもの

のである。茂吉の文学精神を考える上に、重要な問題を取扱つてゐると思ふ。文学といふものに、ひたむきな熱情を傾けようとしてゐる若い学究の論として、御精読を得たい。

●「浄瑠璃評判記解説」は、本号で横山正氏の分を一応終り、次号からは、吉永孝雄氏が続ける予定である。●「國文学」は、小教員の同人雑誌となるようなことを、出来るだけ懸けたいと思つてゐる。誌面に新鮮な活氣を生むるためにも、各位の投稿を期待してゐる。●本号も、いろいろ都合で遅刊した。お詫言上げる。（飯田正一）

國文学（季刊）

定価普通號一部金八拾円（送料別）
一年分 金三百円（送料共）

昭和二十七年五月二十日 印刷
昭和二十七年六月三十日 發行 第七号

定価 金八拾円

發行所 関西大學國文学会

代表者 澤田久幸

印刷所 大谷印刷株式会社

大阪府吹田市千里山

發行所 関西大學國文学会
〒565 大阪二五八四番